

# 都藝泥布

今年の紅葉は、例年より遅くまで楽しめましたが、会員のみなさまにおかれましては、お変わりなくお過ごしでしょうか。

2024年9月29日（日）第63回地名フォーラムを宇治市生涯学習センターで開催しましたところ44名の方（会員18名・非会員11名・歴史探訪の会14名・洛タイ記者1名）にお運びいただきました。ありがとうございました。あわせて運営に際して、お世話になりましたみなさまに誌上をお借りしてお礼申し上げます。

以下にその内容をまとめましたので、ご覧ください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 発表1 笹川 博司氏（本会理事）

### 源氏物語「宇治十帖」に描かれた「宇治」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

先日最終回を迎えた今年のNHK大河ドラマ

「光る君へ」の放映により、紫式部や『源氏物語』への関心が高まるなか、笹原氏の発表は、光源氏亡き後の「宇治十帖」に描かれた「宇治」の情景を、当時の平安貴族がどう捉えていたのかを探るものであった。まさに、（笹川 博司 氏）時節に即応したテーマと言えよう。



「宇治十帖」の物語の中心人物である「薫」は、光源氏の実子ではなく、妻「女三宮」と「柏木」との間にできた「罪の子」であった。自身の出生の秘密を感知した薫は、仏道に傾斜しながらも、姫君ら

## 京都地名研究会 会報 第86号

令和6年12月21日 発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫 吉田 金彦氏（初代会長）

編集 京都地名研究会事務局

への愛執に苦悩する。物語の舞台となる宇治には、政争に巻き込まれて山里に隠棲する「八の宮」が、大君・中君と暮らし、後には浮舟が隠れるように暮らしていた。ここに薫と薫のライバルとも言える「匂宮」を加えて物語が進展するのである。

笹川氏は、紫式部が「宇治といふ所」の「山重なれる御住み処」「峰の朝霧晴るる折なく・・・」山里や、宇治川の「あやしき舟ども」が「はかなき水の上に浮かびたる」景観に、薫の「世の常」無き心情を描く舞台としたことを説いた。そして、薫を装って浮舟と契る匂宮の裏切りや、煩悶した末に死を決意する浮舟の悲劇の舞台として、宇治の景観が設定されているのである。

（中島 正 記）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 発表2 岩田 貢氏（本会理事）

### 城陽「大谷」は“葬送地”の関連地名か？

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

始めに、今回の発表は、2024年1月に逝去された元・本会副会長糸井通浩氏の『地名探究』第21号（2023）中での「これからの地名研究－私の課題－」にて記された内容に応えるものであることを説明した。



（岩田 貢氏）

それは「私の課題は、城陽市（南部の「青谷」より）北部の『(上・下)大谷』『大谷川』の『大谷』の方である。（中略）古代古墳の散在する『大谷』地区は、もと『青谷』だったのではないか」というものである。